

【特集】

禍難を乗り越えて

日本の病の絵

矢島 新

はじめに

令和二年は新型コロナウイルス感染拡大の真ただ中にある。人類はウィルスとの戦いを繰り返してきたが、この一年もそれに明け暮れた年として、人々の記憶に深く刻まれることになるだろう。

このコロナ禍を受けて本誌でも特集を組むことになり、筆者も美術史の立場から筆を執るようにとの依頼を受けた。筆者は病の絵を専門に研究する者ではないが、学芸員時代に企画した展覧会^①で疱瘡絵や麻疹絵を取り上げた経験はある。その時の感触を手掛かりに、病を描いた絵の歴史を振り返ることで、わずかに責を果たしたい。今回の事態を受けてこの種のテキストは日本中で書かれるに違いなく、さしたる新知見を盛り込むわけではない本稿

にどれほどの意味があるのか心もとないが、あらためて病に関する絵の歴史を振り返る中で気づかれたことを交えながら、私見を記してみよう。

*

*

具体的な事例の検討に移る前に病気にかかわる事項を確認しておく、かつて日本では疫病の流行は疫病神の仕業であり、怨霊や神の祟りと考えられていた。『今昔物語』には伴善男が疫神になった話が載っている（巻二十七「或所膳部見善雄伴大納言霊語第十一」）。《伴大納言絵巻》の主人公として知られる伴善男は怨霊（御霊）と呼ぶにはかなり小者だが、当時恨みを残して死んだ者は疫神化すると考えられていたことがわかる。

典薬寮や施薬院などの医療機関も置かれていたが、民間の疫病対策は祈祷や祈願に頼る他なかった。中でも節分、端午の節句、夏越の祓いなどの季節の行事は、かつての疾病対策や健康祈願を

考えるうえで重要である。目に見える行事を行うことによって、人々の恐れや不安を取り除こうとしたのだが、これらの行事に関しては、民俗学や歴史学において多くの業績が積み重ねられているので、それらの要点をかいつまんでおく。

まず節分は季節節の変わり目のことだが、その際に邪気（鬼）が生じると信じられたので、それを払う行事が行われた。まず大晦日に宮中で行われたのが追儺である。中国から持ち込まれたこの行事は文字通り（疫）鬼を追い払うもので、方相氏と呼ばれる追出し手は、鬼を怯えさせるために目が四つある恐ろしい面を被り、熊の毛皮をまとった。平安時代中期に編纂された『政治要略』（巻二十九・年中行事・十二月下「追儺」）にこの方相氏と疫鬼の図（図1）が収載されている。普通の筋肉質の男のように見える疫鬼の表現に注目したい。

この行事には魔をもつて魔を制するという考え方が示されているが、この追儺が現在節分で行われている鬼追いの原型と言われている。追儺の伝来は奈良時代のことだが、興味深いのは、この恐ろしい面を被る方相氏が、平安時代以降次第に追い払われる鬼そのものに転化したことである。善神から悪神への転換が起こったわけだが、そのような両義性は、日本の疫病神を考える際の重要なポイントである。

図1 追儺の疫鬼と方相氏（『政治要略』巻二十九・年中行事・十二月下「追儺」所収）



五月五日の端午の節句も中国から伝来した行事である。戦国時代の屈原の故事に起源すると言われ、南北朝時代に夏季の疾病予防として菖蒲が用いられはじめたとも言われている。日本で子供健康を祈念する行事になった経緯は必ずしも明確ではないが、江戸時代になると、各家庭で絵幟を立てるようになる。その図様は弁慶や義経のような有名な武将や、鯉の滝登りのような中国の故事に取材するものなど多岐にわたり、鍾馗(図2)や菖蒲などの疫病除けに直接かわるモチーフも見られた。

絵幟は子供の健やかな成長を願う親や祖父母の心情が形になったものである。現代では鯉幟がこれにとって代わり、絵幟の伝統はほとんど失われてしまったが、近年の北村勝史氏の精力的な収集・研究で、江戸期の幟旗がようやく知られるようになった。町絵師の優れたデザイン感覚が発揮された貴重な文化遺産として今後は大切にしたいものである。

旧暦の六月晦日(新暦七月三十一日)に行われる場合もある)に

図2 鍾馗図絵幟(個人蔵)



行われる夏越の祓は、年の前半の罪穢を祓うものである。宮中で行われる大祓が民間でも行われるようになったものといひ、雑菌が繁殖しやすい季節の前に、疫病予防と健康を祈願する行事であった。その際素盞鳴尊(スサノオ)などを祀る神社では茅で作った巨大な輪を設置して、それをくぐれば厄が払われるとする「茅の輪くぐり」を行っている。

この茅の輪くぐりは、『釈日本紀』に引用される『備後国風土記』逸文に見える武塔神の伝説に由来している。簡単に紹介すると、嫁取りの旅に出た武塔神が宿を乞うたところ、裕福な巨旦將來は断り、その兄の貧しい蘇民將來はもてなした。後にその地を再訪した武塔神は、茅の輪をつけさせた蘇民將來の娘を除いて巨旦一族を皆殺しにし、自らが素盞鳴尊であると明かしたという。今日でも「蘇民將來子孫」と書いた疫病除けの護符(紙札・粽・木製の角柱など様々な形態がある)を授ける神社は多い。

武塔神は素盞鳴尊の異名であり、仏教起源の牛頭天王とも同体と考えられていた。疫病を引き起こす力があるということは、起こさずにいる選択も可能ということであろう。かつて牛頭

天王を祭神としていた京都八坂神社（旧名祇園社、現在の祭神は素盞鳴尊・櫛稲田姫命・八柱御子神）の祇園祭は、悪霊や疫鬼を鎮め、祓う祭りである。今年も新型コロナウイルスの感染拡大を怖れて規模をかなり縮小せざるを得なかったが、皮肉な事態と言わばきであろうか。牛頭天王については後に触れるが、この神の両面性には注意したい。

一、古代から中世にかけての作例

かつて絵は、偉大なものや美しいものなど、プラスの価値を描くものがほとんどであった。病のようなマイナスの闇を描く例は当然ながら洋の東西を問わず例が少ないのだが、それでも疫病に関わる絵は、日本の絵画史の中で時折描かれている。まず古代から中世にかけての展開を、時代を追ってたどってみよう。

【病草紙】

病を描く絵と聞いて多くの人が最初に思い浮かべるのは、十二世紀後半に描かれた《病草紙》であろう。絵巻の愛好家として知られる後白河法皇の周辺で、地獄草紙や餓鬼草紙とともに、六道絵巻を構成する一点として製作されたと考えられている。人道の

苦しみの表現として、病の諸相が描かれたというわけである。病草紙は現在軸装された21図に分かれているが、元は絵巻であった。今21図の分析を行う余裕はないが、感染症こそ描かれていないものの、不眠症や眼病のようなありふれた病気はもちろん、男性器と女性器をともに持つ人物（二形）のような架空の症例まで含んだ、病気図鑑のような絵巻である。眼病の治療などは描かれるものの、病気の根絶を祈願するような性格の絵ではなく、病者をあざけるような気分さえ感じられる冷徹な絵である。京都国立博物館所蔵の10図が国宝指定されていることが示すように、絵師のリアリズムの技量がよく示された作品である。

【辟邪絵】

辟邪絵と呼ばれる作品も病に関わる絵と見ることができ。病草紙とはほぼ同時期に制作されたもので、《天刑星》、《梅檀乾闥婆》、《神虫》、《鍾馗》、《毘沙門天》の5点の断簡が残されている。梅檀乾闥婆と毘沙門天は仏教系、天刑星、神虫と鍾馗は道教系と、様々な神仏が疫鬼を退治する様子を描いたものである。やはりかつては絵巻であり、六道絵巻を構成する一点であったと考えられている。ただし六道の苦しみではなく善神が悪鬼を退治する様を描くものなので、六道絵巻の一巻であるのかどうか議論の余地は

ある。⁽³⁾

5図の中でも鍾馗と天刑星の二図は、病に関わる絵のその後を考える上で重要である。鍾馗は高熱を発して床に伏した玄宗皇帝の夢に現れて、鬼を祓ったと伝える豪傑である。江戸時代には疱瘡絵や幟旗にしばしば描かれ、疫病退治のヒーロー的存在となるが、辟邪絵の鍾馗は鏢の広い特徴的な帽子を被っており、近世の画像とは見た目が少し異なる。

天刑星(図3)は星をつかさどる道教系の神であるが、逆立つ髪や四本の腕などは密教尊のようである。詞書に「かみに天形星となつくるほします／牛頭天王およびその部類ならびにもろ／もろの疫鬼をとりてすにさしてこれ／を食とす」と記されている。すなわち天刑星が捕食しているのは疫鬼牛頭天王とその部類なのだが、奇妙なことに、天刑星と牛頭天王は同体であるという説がその後流布していく。牛頭天王は善悪両面を持つ神なのである。

善神に退治される疫鬼たちは様々な姿に描かれている。天刑星に食われる牛頭天王は肌の色は多様であるものの人に近い姿であるが、毘沙門天に刺し貫かれている疫鬼には牛や鶏などの鳥獣が混じり、毘沙門天に射抜かれる疫鬼は翼を持った天狗のような姿である。平安時代には疫鬼のイメージがまだ定まっていなかったこと

がわかる。



図3 辟邪絵(天刑星) (奈良国立博物館蔵)

【聖衆来迎寺の六道絵】

先に触れた病草紙は、六道の一つである人道の苦しみを病で代表させて描いたものと一応考えられるが、仏教の説く人道の苦し

図4 人道苦相図・部分（聖衆来迎寺蔵）



みは、四苦八苦に分類される多様なものである。四苦とは生・老・病・死を言い、八苦はこれに愛別離苦・怨憎会苦・求不得苦・五陰盛苦を加えたものである。十三世紀に描かれた聖衆来迎寺伝来の《六道絵》では、この人道の四苦八苦を2幅に分けて描いている。病苦の描写はリアルかつシンプルで、武家屋敷風の質素な室内で女性たちが看護されている老婆が上半身を起

こし、角皿に嘔吐しようとしている場面である（図4）。周囲に疫鬼が描かれていないことに注意したい。

【本尊や祭神の霊験を描く中世絵巻】

平安時代の末から室町時代にかけて、社寺縁起や高僧伝などの宗教絵巻が多数制作されている。それらの中には当該寺社の本尊や祭神が霊験をあらわして、疫鬼を退散させた話を盛り込む例が散見される。以下に代表的なものをいくつか拾いあげてみるが、十二世紀後半に遡る《粉河寺縁起絵巻》は、とりわけ早い例である。

粉河寺は奈良時代に創建された古刹で、その縁起絵巻は本尊千手観音がその地に祀られるに至った創建譚と、その後の霊験説話からなる。霊験説話は河内の国の娘の重い病を、千手観音の化身である董行者が治療する話で、病床の娘の様子が細かく描写されている。娘の顔とはだけた上半身には赤い発疹が現れているので一見疱瘡のようだが、三年も思っていると詞書に記されているので、別の難病なのであろう。病草紙とほぼ同時期の制作であるが、病草紙同様リアリズムの精神が感じられ、病者の周囲に疫鬼は描かれていない。

粉河寺縁起のように本尊や祭神が霊験をあらわして、病者を回

復させるエピソードを盛り込んだ縁起絵巻は、十四世紀に入った頃からその数が急増する。それらを見て気付かれるのは、病者の周囲に疫鬼を描くものが目立つことである。

制作年が判明する作例を順に見ると、まず延慶二年（一三〇九）の奥書を持つ《春日権現験記絵巻》が挙げられる。春日の神の霊

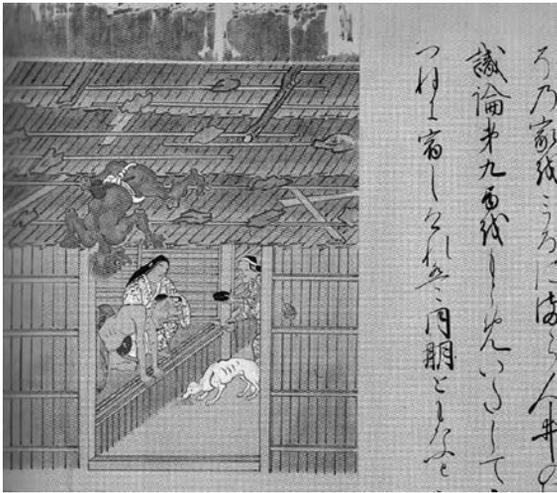


図5 春日権現験記絵巻・部分（三の丸尚蔵館蔵）

験譚を全二十巻

にまとめた中の

第八卷第二段に、

屋根の上から室

内をのぞき込む

疫鬼が描かれて

いる（図5）。赤

肌で筋肉質の半

裸体であるもの、

角は生えていな

いようだ。

応長元年（一

三一一）の奥書

を持つ《松崎天

神縁起絵巻》は

興味深い作例である。その第五卷第六段に、室内の高徳の阿闍梨と向き合う青鬼が描かれている（図6）。詞書きによれば、天神を篤く信仰する教厳阿闍梨が、天神の使者である青鬼に守護されて病人の加持を

図6 松崎天神縁起絵巻・部分（防府天満宮蔵）



行う場面である。

すなわちこの角

のない青鬼は疫

病を引き超すの

ではなく、退散

させる側という

ことになる。第

五卷の第五段と

問題の第六段は、

先行する天神縁

起にはないエピ

ソードであり、

この時代の要請

を受けて加えら

れたものと考え

られている。

《融通念仏縁起絵巻》は融通念仏を広めた良忍（一〇七三―一一三二）の事績を描くもので、鎌倉時代末期の正和三年（一一三二―一三三四）に成立し、その後多くの転写本が作られた。上巻は良忍による教義の確立を描き、下巻には融通念仏の功德が描かれているが、その第九段に、疫鬼までが融通念仏に帰依しようと念仏道場に押しかける場面がある（図7）。疫病退散のために念仏道場を開いた名主の夢の中のシーンで、疫鬼たちはこの後融通念仏に結縁した人々の名を記した番帳を確認して帰ったが、そこに名前がなかった娘は、その後疫病で亡くなったという。疫鬼が病に罹る者と罹らぬ者を選別する力を持つことが分かる。疫鬼には角がある者も無い者もあり、実に多様な姿に描かれている。

十四世紀前半に制作された絵巻を3例挙げてみたが、十四世紀の作例にはこの他に《地藏菩薩靈驗記》、《不動利益縁起》、《因幡堂葉師縁起》、《光明真言功德絵巻》（一二三九八年）



図7 融通念仏縁起絵巻・部分（清涼寺蔵）



などがあり、それぞれ地藏菩薩、不動明王、薬師如来らの仏教尊や、光明真言が靈力を發揮して、疫病を退散させた話を盛り込んでいる。多くの神仏が疫病を鎮める役割を期待されていたことや、寺社がそうした靈験譚をセールスポイントとしていたことが分か



図8 大江山絵詞・部分（逸翁美術館）

る。

疫鬼を考える上で、高橋昌明の『酒吞童子の誕生——もう一つの日本文化』⁽⁵⁾は重要な著作である。高橋は酒吞童子を疫鬼と見て、その誕生の過程を詳しく検証している。酒吞童子伝説の初見資料である『大江山絵詞』（逸翁美術館蔵）が制作されたのは十四世紀であり、疫鬼が絵巻に描かれ始める時期と一致している。退治される酒吞童子は後に定まる鬼の定型とはかなり異なる姿の、十五の目と、五本の角を持った異形である（図8）。十四世紀の時点での疫鬼のイメージの一つと見てよいだろう。

【天野念仏講の六道絵】

先に十三世紀に描かれた聖衆来迎寺の六道絵を取り上げたが、およそ三百年後の十六世紀に描かれた旧天野念仏講の六道絵（出光美術館蔵）も興味深い作例である。この六道絵は筆者が大学院生時代に国華誌⁽⁶⁾上に紹介した思い出深い作品なのだが、地獄絵の中世と近世をつなぐ貴重な作例である。人道は全六幅の最終第六幅に描かれており、病苦の場面では横たわる病人を看護の者が囲み、すぐ脇の縁側に赤鬼と青鬼が立って、室内を窺っている（図9）。疫鬼の描写なのである。その左下の建物内は生苦をあらわす出産の場面だが、その建物の屋根には緑の鬼が取り付いてい

る。この鬼は出産の危険を表すものと考えられるので、疫鬼ではないのかもしれない。隣の部屋では僧が読経をし、庭では男が弓を構えている。安産祈願の魔除けの意味があるだろう（鳴弦）。

図9 旧天野念仏講六道絵第六幅・部分（出光美術館蔵）



計三体が描かれた鬼にはいずれも角があり、現代人がイメージする姿に近い。

【針聞書】

やや特殊な例ではあるが、中世末に著わされた『針聞書』という書物も紹介しておこう。永禄十一年（一五六八）に元行という人物が著したもので、針の打ち方、灸や針を打つポイントを示した図、体中の虫の図とその治療法、体内の解剖図の四部で構成される医学書である。当時の医学知識の一端を示すものであるが、病の原因を架空の疫鬼に求めるのではなく、体中に寄生する虫と考えていたことが分かる。それなりに科学的と言えるだろう

図10 『針聞書』より腹の虫（九州国立博物館蔵）



る。当時の医学知識の一端を示すものであるが、病の原因を架空の疫鬼に求めるのではなく、体中に寄生する虫と考えていたことが分かる。それなりに科学的と言えるだろう

か。

美術史的には図版に示したような虫の図(図10)が興味深い。その素朴な魅力にあふれた表現は筆者が近年称揚している素朴絵の典型であり、それが素朴絵のピークと考えられる十六世紀に描かれたことが重要である。

以上古代から中世までの作例を振り返ってみたが、十四世紀に入る頃に、疫鬼が描かれ始めることが指摘できる。もちろん疫鬼は人には見えないはずだが、あえてそれを描いて病気の原因を目に見えるようにすることが、人々の怖れや不安を取り除くためには必要だったのだろう。興味深いのは、疫鬼は単なる悪霊ではなく、病を引き起こさぬこともできると考えられたことである。融通念仏に帰依する疫鬼までが絵巻に描かれたのである。

二、近世の作例

近世は街道や航路が整備されて人々の往来がある程度盛んになった時代だが、自由な通行が許されたわけではない。異国に開いた長崎の窓は小さく、新たな病原体が流入する危険も少なかった。世界の他の地域に比べて感染症の大規模流行は少なかったのだが、それでも疱瘡や麻疹などのウィルス性感染症はしばしば流

行している。

しかし筆者の乏しい知見では、近世初期から中期にかけては、病に関わる絵があまり思い浮かばない。大津絵の中の鍾馗や為朝を描くものや、異形の元三天師(角大師)を描いた護符などを、わずかに挙げるくらいだろうか。もちろんそれらの素朴な画像に祈った人々も多かったのだろう。

農山村の医療には修験者らの験力や薬草の知識が力を発揮したと思われるが、円空をはじめとする諸国を旅する造仏聖もそうした役割を担う存在であり、彼らが彫った神仏の像には病氣平癒の期待が寄せられたものと思われる。もちろん病の回復だけでない様々な祈りの対象となったのだろうが、円空の後継者と言うべき木喰の展覧会を担当した際に、かつては木喰仏を削って薬として飲んだという話を耳にした。円空は近世前期の人だが、木喰が仏像を彫り始めたのは近世も後半にかかる頃である。当時の山村部での医療の貧しさを示す事例と言えようが、まさにそうした時期に描かれ始めたのが、疱瘡絵である。

【疱瘡絵】

近世に流行した感染症の中で、最も恐れられたのは疱瘡(天然痘)である。麻疹の流行が二十年近く間隔が空いたのに対し、六



図11 歌川国芳《鎮西八郎為朝》（東京都立中央図書館蔵）

7年の間隔で流行を繰り返した疱瘡は、一度罹患すると免疫ができて再びは感染しないため、子供時代の通過儀礼的な側面を持つ病気であった。

致死率は高く、回復した場合も顔などにひどいあばたが残ることがあったのも、怖れを増幅させた一因であった。疱瘡に罹ることは避けられないにしても、あばたの残らぬように軽く済ませたいと考える人が多かったのである。

近世も半ばを過ぎる頃、繰り

返される疱瘡の流行に対処するために、疱瘡絵と呼ばれるものが描かれ始める。「疱瘡絵」は明治になってできた言葉であり、当時は「紅絵」（あるいは赤絵）と呼ばれていた。広義には国芳が描いた《鎮西八郎為朝》（図11）のような錦絵も含めるが、狭義には赤を主体とする版画を言う。赤一色、あるいはそこに数色を加えるだけの、一目でそれとわかる安手の版画である（図12）。患者が出た家に見舞いとして贈られ、回復後は川などに流されたと言われている。消耗品としてのアートであった。

図12 歌川芳綱《富士・達磨・鍾馗・為朝・鯛車》（国立歴史民俗博物館蔵）



疱瘡絵については、H・O・ローテルムンドの『疱瘡神 江戸時代の病いをめぐる民間信仰の研究』という記念碑的著作があり、その後もいくつかの研究が積み重ねられている^⑩。それらによれば、疱瘡絵に赤が用いられるのは、疱瘡を発病させると考えられた疱瘡神が赤を嫌う（あるいは好む）と考えられたからであり、痘疹の色が赤い病人は軽く済むと信じられたからであると言う。

先行研究は疱瘡絵の画題をおおむね三つに分類している。第一は鍾馗や為朝などの武勇に優れた歴史上の人物である。彼らの超人的な武力にあやかっつて、疱瘡神を抑え込もうとしたのである。鍾馗が唐代から魔を祓う力を期待されて神と見なされたことはすでに述べたが、日本のあまたの武將の中で為朝が選ばれたのは、曲亭馬琴が『椿説弓張月』の中で、八丈島（八郎島）へ上陸しようとした疱瘡神を追い返したと創作したこと由来するという。

第二は縁起の良いものである。鯛車、春駒、羽子板、梅、富士山、蓬萊山などがこれにあたる。疱瘡絵の知識がないと病に関わるとすぐには理解できないような祝祭的モチーフである。あらかじめ回復を祝ってしまおう（予祝）ということなのだろう。

第三は元気よさや回復を連想させるものである。元気に遊ぶ金太郎や、すぐ起き上がるダルマなどがこれにあたる。やはり予祝という考え方に基づくのだろうが、玩具類が描かれるのは、親

が発症した子供に与えて、安静に隔離しようとしたからだという。病が去ぬ、あるいは去ることを祈念して描かれる犬や猿もこのタイプに分類されるが、この種のダジャレに類する連想は、江戸庶民の生活誌を紐解けば、そこかしこに見出せるものである。

また疱瘡絵にはしばしば和歌が記されるが、そこには「軽く」「かろかる」「かるかる」といった言葉が頻繁に用いられている。疱瘡が軽く済み、後遺症のあばたが残らぬことを祈念する呪歌である。

第一タイプのポイントである武をもって疱瘡神を制するという考え方は、病の克服を願う絵として理解しやすい。鍾馗は古代から連綿と描かれてきた伝統的な画題だが、近世後期には北斎の作例（ポストン美術館蔵）のように朱一色で描かれたものも登場している。疱瘡除けに特化した鍾馗像と言えよう。

為朝を描く疱瘡絵は数多いが、その流行のきっかけの一つに、先述の『椿説弓張月』の挿絵として葛飾北斎が描いた為朝像が挙げられる。歌川国芳の《鎮西八郎為朝》（図11）は紅絵ではなく錦絵だが、岩に腰掛けるポーズは、北斎画にヒントを得たものであろう。老人姿の疱瘡神が為朝に手形を捺した証文（疱瘡を二度と流行らせない旨が記されている）を差し出し、犬、ミミズク（失明せぬようにという意で描かれる）、ダルマなどの、紅絵ではお

図13 歌川国芳《八郎大明神回向院にて開帳の図》(個人蔵)



なじみのモチーフが後に控えている。国芳は《八郎大明神回向院にて開帳の図》(図13) という錦絵も描いており、国芳画と似たポーズの縫物細工の為朝像が両国の回向院で開帳されたことが知られる。為朝は江戸の人々のヒーローだったのである。

数は少ないが、記紀神話の主役の一人である素盞烏尊も疱瘡絵に描かれている。先に述べたように、素盞烏尊は牛頭天王と同体と見なされていた。すなわち疫病と深くかかわる神であり、荒ぶる神を代表する存在でもある。

素盞烏尊を主役とする絵としてまず取り上げるべきは、北斎が

図14 葛飾北斎《須佐之男命厄神退治之図》



牛島神社に奉納した《須佐之男命厄神退治之図》と呼ばれる大絵馬であろう。この大絵馬は関東大震災で焼失してしまったのだが、近年明治四十三年の国華二四〇号掲載の写真(図版14)に基づく精巧な複製が作られて、現在すみだ北斎美術館に展示されている。やはり岩に座る素盞烏尊を15体の様々な疫神が取り巻き、証文を提出している図様である。江戸の人々にとって、素盞烏尊も疫病を力強く退治してくれる神だったのである。

改めて第一タイプを検討すると、鍾馗については疫鬼を文字通り懲らしめてい

る図様が多いのだが、為朝と素盞烏尊については疫鬼をねじ伏せるのではなく、これ以上流行させないことを誓わせている図様が目立つ。疫鬼についても老人であったり子供であったりと、あまり凶悪な姿に描かないものが多い。そこには疱瘡神を悪と決めつけるのではなく、折り合っていこうという姿勢がうかがえる。

そのこととも関連するのだが、疱瘡絵の最大の特徴は、第二・第三のタイプが半数以上を占めることだろう。一見疫病退治とは無関係に見える祝祭的なモチーフを描く例が極めて多いのである。多くの論者が説くように、疫病の根絶は難しいと考えた上で、せめて軽く済ませたいと願う表現ということなのだろう。

【コレラ絵】

コレラは海外で多発した細菌性の感染症である。近世にはほとんど流入しなかったが、外国船が頻繁に來航した幕末には、幾度か大きな流行があった。

江戸における流行としては、『武江年表』に記される安政五年（一八五八）八月のものがあるが、この年に版行された病関連の絵は、コレラに関わる可能性が大きい。疱瘡絵や麻疹絵に比べて言及されることが少ないが、『加藤清正の手形』（図15）や歌川芳員の《諸神の加護によりて良薬悪病を退治す》（図16）、五雲亭貞

秀の《日本英雄傳之内神代素盞烏尊悪神退治之図》（図17）などには同年8月の改印が捺されており、コレラの流行に合わせた出版と見られる。芳員の絵では様々な病気が退治されているのでコレラ絵とは言い切れないが、その流行が版元の念頭にあったとみてよいだろう。¹¹⁾

コレラはコロリと死ぬことから虎狼狸とも表記され、上半身が虎、下半身が狼、睾丸が狸というコレラの怪物を、衛生隊が消毒液を吹きかけて退治している錦絵も、明治になって版行されている。表記に虎の字が用いられたのは、コレラの感染拡大が虎のように速いと形容されたからだという。加藤清正の手形（図15）が

図15 《加藤清正の手形》（日本医学文化保存会蔵）



描かれたのは、虎退治で知られた猛将だったからだろう。

この絵の上部には素盞鳴尊と菅丞相（道真）の歌が賛として記されるが、清正も神と祀られ

図16 歌川芳員《諸神の加護によりて良薬悪病を退治す》(東京大学社会情報研究所蔵)



で疫鬼を痛めつけている。

安政五年に版行された絵はさほど多くはないが、その図様は疱疹絵や麻疹絵とやや趣を異にし、日本の神が疫鬼を力で抑え込もうとする傾向が認められる。この時のコレラの流行は長崎に來航

る武将である。つまりこの絵には、日本の神々の力が集められているのである。芳員の絵では牛頭天王を先頭に、神田大明神、氷川大明神、山王大権現ら多くの神々が雲に乗って飛来し、その援護をうけて大黄らの薬が様々な病の症状を退治している。貞秀の絵では、素盞烏尊がその剛腕

図17 五雲亭貞秀《日本英雄傳之内神代素盞烏尊惡神退治之圖》(日本医学文化保存会蔵)



したアメリカ船ミシシッピ号から始まったのだが、外来の敵という意識が絵に表れたのかもしれない。当時の攘夷の風潮が反映しているのだろうか。

【麻疹絵】

麻疹は疱疹と並んで人々に恐れられた感染症である。武江年表によれば、元和二年(一六一六)から文久二年(一八六二)までの約二百五十年間に十四回流行しているの、二十年弱の間隔で

流行したことになる。中でも文久二年の流行では死者一万五千人に及んだが、この年には大量の麻疹絵が版行されており、研究者に注目されている。

麻疹絵については論文⁽¹²⁾がいくつか発表されているので、本稿では簡略な紹介にとどめたいが、その図様の多様さには驚かされる。鍾馗や為朝を描くものは少数にとどまり、当時の俗信に関する知識のない現代人には理解し難いものが多い。例えば《はしかまじなひおしえ宝》(図18)という一枚は、擬人化された金柑、飼葉桶、麦の穂の三人が膝を突き合わせているなんとも不思議な図様である。

各モチーフについて解説しておく、まず麦が描かれるのは、穂の先の細く硬い芒(のぎ)が「はしか」と呼ばれることに由来している。芒(はしか)があるのに実を結ぶ麦にあやかうとしたのである。賛の最後の二行は「麦どのハ生れぬ先にははしかして／かせたる後ハ我身なりけり」という歌である。たとえ麻疹に罹っても、癒せた(傷が乾いた)後は体が元に戻ることを祈念する呪歌であり、多くの麻疹絵に記されている。麦殿大明神という奇妙な神を人々が拝んでいる図様の麻疹絵も知られている。

飼馬桶は馬に麦の芒を食わせることに由来するのだろう。飼馬桶を頭に被れば、麻疹を免れると信じられていたという。金柑は

喉のいがらっぽさを抑えることに由来するようだ。右上の《はしかまじなひおしえ宝》というタイトルが記される葉はタラヨウ(多羅葉)という木の葉で、この葉に先の呪歌を書いて川に流すと良いとされていたという。実際の葉が手に入らない時は、この絵を切り抜いて使ったのである。つまりこの絵には、麻疹除けに効能があると信じられていた様々な呪物が詰め込まれているのである。

麻疹絵に鍾馗や為朝のような豪傑が描かれた例は少ないが、
図18 歌川芳艶《はしかまじなひおしえ宝》(内藤記念くすり博物
館蔵)





図19 歌川芳盛《流行麻疹退散の図》(内藤記念くすり博物館蔵)

《流行麻疹退散の図》(図19)では天神が持つ鏡が発する光が疫鬼を退治している。天神、すなわち菅原道真はかつて怨霊であり、疫病を引き起こす存在だったのだが、ここでは疫病を抑える神に転化している。

この絵で興味深いのは、上部に描かれた書物の右ページに「食てよいもの」、左ページに「大毒になるもの」が記されていることである。食して良いものとして黒豆や小豆などが挙げられ、大毒になることとして、房事や朝夕に風にあたることなどが挙げら

れている。実に具体的な疫病対処法である。当時の人々が切実に求めた情報なのだろう。食べてよい食品として列記されるのは総じて消化が良いものであり、ある程度医学的に根拠がある情報とも言えそうである。食してよい食品軍と、毒になるとされた食品軍が戦っている図も描かれるなど、麻疹絵には実用的知識を詰め込むものが多い。

社会風刺の要素が含まれた例も見られる。《毒たてやうじやう》(図20)という一枚を見ると、画面下の二人がどうやら麻疹を引き起こす麻疹神で、飼馬桶を振りかざす男と、これも麻疹に効能があるとされた房楊枝を持つ男がこれに打ちかかっているが、間に擬人化された葉が割って入っている。麻疹の流行時には薬屋と医者が増盛したので、人々の反感を買ったという。葉は麻疹神に立ち向かうのではなく、逆に庇おうとしている。

こうした表現には既視感がある。麻疹絵が量産された文久二年(一八六二)の七年前の安政二年(一八五五)に、江戸は大地震という別種の災禍に見舞われたが、この時に鯨絵と呼ばれる錦絵が量産されている。当初は地震を引き起こした鯨を悪者として描くものが大半であったが、次第に再建ラッシュで儲かった大工や材木商を批判する絵が増加したのである。麻疹絵も似たような流れをたどったと見て良いだろう。

図20 歌川芳盛《毒だてやうじやう》（内藤記念くすり博物館蔵）



文久二年に出版された麻疹絵には、これらの他にも麻疹から回復した人気俳優沢村田之助を描くものや、幕末に流行した拳遊びをモチーフとするものなど、実に多彩な図様が考案されている。そうしたモチーフ面の分析はかなり進んでいるのだが、絵画史の上で重要なのは、麻疹はそれまで何度も流行を繰り返しているのに、なぜ文久二年に限って多くの麻疹絵が出版されたのかということだろう。

おそらくその答えは幕末の出版事情に求められる。富沢達三が

指摘しているように^①、幕末には先述の鯨絵や、かつて筆者が紹介した有封絵^②のような時事的な出版が相次いでいる。麻疹絵の突然の大量発行も、当時の出版事情によるところが大きいのだろう。鯨絵も有封絵も図様の多彩さが見所だが、麻疹絵についても同じことが言える。

【流行神】

幕末の時事的な出版の一つに流行神を描くものがある。流行神とは江戸市中の祠に祀られる神が突然人々の信仰を集めたものを言い、享和三年（一八〇三）に流行始めた浅草太郎稲荷や、嘉永二年（一八四九）に流行ったお竹大日と内藤新宿正受院の奪衣婆が有名である。

今年話題となったアマビエは、弘化三年（一八四六）に肥後の海中から出現したと言い、市中に祀られる神でもなければ、江戸で流行ったわけでもないが、各地で目撃談が相次いだ件という妖怪なども含めて、幕末の混乱する社会環境が生み出した流行神の一種と言って良いだろう。疫病退散を願う民衆の心が生み出した妖怪なのであろう。

三、退治される疫鬼・退治する神

前節まで病に関わる絵の系譜を平安時代末から江戸時代末までたどってみたが、絵に登場する退治される疫鬼と退治する神について、若干の分析を試みよう。

古代中国の病氣や医学を研究している長谷川雅雄は、「中国の古い医書には、「鬼」を病因とする「鬼病」の記載が多く見られ、かつての医学が病因としての「鬼」をいかに重視していたかが知れる」と述べている。¹⁶ 古代中国においては疫病の原因として鬼が想定されていたのだが、そうした考え方は、当然日本に流入した。平安時代の辞書『和名類聚抄』は、「鬼」を「穩」が転訛したものとして記している。姿の見えぬ、この世ならざるものと言うことだろう。本来鬼は目には見えないはずだが、四天王に踏みつけられているのも鬼、地獄で刑務官を務める者も鬼と呼ばれ、それぞれが仏像や地獄絵にはつきり造形化されている。

そのようにかつて鬼の姿や出自は様々だったが、赤や青の肌をして、筋肉質で、角が生え、虎皮の褌を締める鬼のイメージが徐々に出来上がり、現代に及んでいる。その確立過程の解明は、私が指導している大学院生の修士論文のテーマであり、その興味深い

論考の完成を待ちたいが、本稿のように疫病関係に限っても疫鬼の姿には様々なバリエーションがあつて、一筋縄ではいかない。今は十四世紀に入る頃から縁起絵巻に疫鬼が描かれ始めることと、十六世紀には現代人のイメージする姿に近い作例が登場することを、指摘するにとどめたい。

近世後期の疱瘡絵や麻疹絵になると疫鬼の姿はかなり変化している。本稿で取り上げた中では、《鎮西八郎為朝》(図11)、《須佐之男命厄神退治之図》(図14)、《諸神の加護によりて良薬悪病を退治す》(図16)、《日本英雄傳之内神代素盞烏尊悪神退治之図》(図17)、《流行麻疹退散の図》(図19)、《毒だてやうじやう》(図20)に疱瘡神や麻疹神の描写が見られるが、もはや疫鬼とは呼べぬものがほとんどである。葛飾北斎筆の《須佐之男命厄神退治之図》(図14)には様々な病の主が描かれるが、その姿は気味の悪い異形ではあるものの、一般にイメージされる鬼とはかなり落差がある。疫鬼より疫神と呼ぶべきだろう。

歌川国芳の《鎮西八郎為朝》では、為朝の正面に並んだ証文を差し出す老人と、赤い餅のようなものを口に運んでいる子供が疱瘡神と考えられる。ともに鬼とは程遠い姿である。歌川芳員の《諸神の加護によりて良薬悪病を退治す》で退治されているのは、頭に病名が書かれた円を乗せた普通の人間である。かつて山東京伝

が創出した善玉・悪玉に倣った病気の擬人化であろう。歌川芳盛の『毒だてやうじやう』については先に簡単な分析を試みたが、麻疹神はどこにもいそうな町人として描かれている。そのあまりにも普通な姿は、疫病が身近な存在であったことの表れなのだろう。

興味深いのは歌川貞秀の《日本英雄傳之内神代素盞烏尊悪神退治之図》(図17)と歌川芳盛の《流行麻疹退散の図》(図19)である。退治される疫鬼の表現は両者よく似ており、上半身裸の普通の男である。髪は逆立っているものの、角はない。その姿は、先に触れた平安時代中期の『政事要略』に掲載される図(図1)によく似ている。古い疫鬼の表現が地下水脈のように続いていたということだろうか。

退治する側に目を移すと、中世においては観音や不動などの仏教尊が目立ったが、近世後期の疱瘡絵や麻疹絵では日本の神々が主役である。中国の伝説上の人物である鍾馗は別格だが、出雲の神(素盞烏尊)や天神、新たに創出された麦殿大明神など、実に様々な神が描かれている。為朝も八郎大明神と呼ばれる神であった。

疫病にかかわる神の代表格と言うべき牛頭天王は仏教に出自があるが、素盞烏尊と同体と見なされて、祇園社に祀られる神と

なった。先述したように牛頭天王は元々天刑星に退治される疫鬼であったが、その後疫病を鎮める神となったのである。そうした両面性が、疫病にかかわる神の特徴であろう。素盞烏尊は粗暴ゆえに天界から追放された荒ぶる神であり、天神菅原道真は人々を恐怖に陥れた怨霊であった。為朝は敗軍の将であり、伊豆大島へ流刑になっている(『椿説弓張月』では伊豆大島からさらに八丈島(八郎島)に渡ったと設定されている)。

『続日本紀』卷三十二の宝亀4年(七七三)の条には、疫神を諸国で祀らせたという記事が見える。疫病と神は奈良時代から表裏一体だったのである。強い力を持つものが悪にもなり善にもなるという構図は、日本の精神風土にしばしば見かけるものである。没後に朝廷に雷を落とし、疫病を引き起こした怨霊道真が、その後天満自在天神と祀られて、和歌や学問など様々な分野の神と崇められるにいたったのはわかりやすい例だが、怪獣でありながら慈雨をもたらす龍、それよりかなり小ぶりだが多くの神社で祭神とされる蛇、墮地獄を命じあるいは免れさせてくれる閻魔王、魔物のように恐ろしい形相に変じた元三大師良源(角大師)など、類例の例は多い。

日本の神は常に慈悲深かったわけではない。時には崇る怖さも持ち合わせていた。日本の自然はそこに住まう人々に多大な恩恵

を与えてくれるのだが、時には大きな災害をもたらしもした。それを人格化したのが神である。自然を神として丁寧に祀ることにより、時折襲ってくる災害を極力抑えようとしたのが日本の神道であったと言っても良いかもしれない。

疫神にもおそらく同様のことが言える。疱瘡を引き起こす目には見えぬ存在を疱瘡神と祀ることにより、疱瘡に罹らない、あるいは罹患しても軽く済むことを祈念したのである。自然災害を完全に抑え込むことができないのと同様に、疱瘡や麻疹には決定的な対策がなかった。神と祀って共生していくよりほかなかったのである。

疱瘡絵や麻疹絵は江戸時代の人々の祈りの結晶であり、多くの人々が購った消耗品である。世界に類を見ない絵画と言って良いだろう。表現の点では疫病を退治するイメージが弱いのが大きな特徴で、そのような日本人の神や疫病に対する観念を読み解くための、貴重な研究材料でもある。コロナの時代にあつて、現代人に貴重な示唆を与えてくれる存在とも言えるだろうか。

注

(1) 特別展「近世宗教美術の世界」(渋谷区立松濤美術館、一九九三年)と特別展「浮世絵師たちの神仏」(渋谷区立松濤美術館、一九九九年)

(2) 疫病に関わる民俗学関連の業績としては、大島建彦「疫神とその周辺」(岩崎美術社、一九八五年)が疫病全体を見渡した古典的著作として挙げられる。疱瘡神や麻疹神に関するものについては注(10)を参照されたい。その他祇園(牛頭天王)信仰に関するものや、ササノオに関わる論文等が発表されているが、多数に及ぶのでここでは割愛する。

(3) 宮島新一「辟邪絵—わが国における受容」(美術研究三三二号、一九八五年)
 (4) 松原茂「松崎天神縁起」小考」(続日本絵巻大成16松崎天神縁起) 中央公論社、一九八三年

(5) 高橋昌明「酒吞童子の誕生—もうひとつの日本文化」(中公新書、一九九二年)

(6) 拙稿「新出の六道絵六幅対をめぐって」(国華) 一一二〇号、一九八九年
 (7) 拙著『日本の素朴絵』(ヴェブックス(第二版より)パイ・インターナショナル、二〇一二年)、拙著『ユルかわ日本美術史』(祥伝社新書、二〇一八年)

(8) 疱瘡絵という言葉の初見は明治三年に飯島虚心が著した『日本絵類考』と言われている。

(9) H・O・ローテルムンド「疱瘡神 江戸時代の病いをめぐる民間信仰の研究」(岩波書店、一九九五年)

(10) 江戸時代の疱瘡絵や麻疹絵に関わる主要な論文としては以下のものがある。
 藤井裕之「疱瘡・麻疹にみる病観—疱瘡絵とはしか絵の比較—」(近畿民俗 一四二・一四三号、一九九五年)

川部裕幸「麻疹絵の文献的研究」(国際日本文化研究センター紀要二二号、二〇〇〇年)

加藤光男「文久2(1862)年の麻疹流行に伴う麻疹絵の出版とその位置づけ」(文書館紀要一五号、二〇〇二年)

畑有紀「幕末の麻疹と食—食物本草本を中心に」(言葉と文化二二号、二〇一一年)

石垣絵美「疱瘡絵の画題と疱瘡除け」(國學院雜誌一一八―七、二〇一七年)
 小林香那子「浮世絵と庶民信仰・疱瘡絵をめぐる」(論究日本文学一〇九
 号、二〇一八年)

展覧会図録やそれに類するものとしては以下のものがある。

「錦絵に見る病と祈り 疱瘡・麻疹・虎列刺」(町田市立博物館、一九九六年)
 『くすり博物館収蔵資料集④はやり病の錦絵』(内藤記念くすり博物館、二
 〇〇〇年)

「病よ去れ 悪疫と呪術と医術」(古河歴史博物館、二〇〇一年)

「病まざるものなし―日本人を苦しめた感染症・病氣―そして医家」(内
 藤記念くすり博物館、二〇一一年)

(11) 安政五年の九月に出版された「流行病追討戯軍記(ころりついでとおどけ
 「ぐんき)」というタイトルの墨摺一枚絵は、「狐狼利疫病守平忌成」を大将に
 「手足冷太郎脈無」らに加わって暴れまわる疫病軍を、「施薬虎之頭諸人為成」
 大將軍が軍を結成して鎮圧するという筋の戯作と、その戦闘の絵を載せている。
 コレラも笑いに変えるしたたかな戯作者魂がうかがえる。

(12) 注(10)参照

(13) 鯨絵に関する古典的著作に、Cアウエハント『鯨絵 民俗的想像力の世界』
 (せりか書房、一九七九年)がある。その後宮田登と高田衛によって『鯨絵
 震災と日本文化』(里文出版、一九九五年)が編集され、それに収録された多
 くの論考が委細を尽くしている。

(14) 富沢達三「幕末の時事的錦絵とかわら版 錦絵のちから」(文生書院、二〇
 〇四年)

(15) 拙稿「有卦絵」(『陰陽道の講義』(嵯峨野書院)所収、二〇〇二年)

(16) 長谷川雅雄・辻本裕成・ベトロ・クネヒト「鬼」のもたらす病―中国およ
 び日本の古医学における病因観とその意義―(上) (『南山大学紀要』『アカデ
 ミア』人文・自然科学編一六号、二〇一八年)

図版出典

(図1) 『新訂増補国史大系28政治要略』(吉川弘文館、一九六四年)

(図2) 『江戸の幟旗』(渋谷区立松濤美術館、二〇〇九年)

(図3、4) 「源信 地獄極楽への扉」(奈良国立博物館、二〇一七年)

(図5) 『続日本絵巻大成15春日権現験記絵・下』(中央公論社、一九八二年)

(図6) 『続日本絵巻大成16松崎天神縁起』(中央公論社、一九八三年)

(図7) 『続日本絵巻大成11融通念仏縁起』(中央公論社、一九八三年)

(図8) 『続日本絵巻大成19土蜘蛛草紙 天狗草紙 大江山絵詞』(中央公論社、
 一九八四年)

(図9) 『中世庶民信仰の絵画』(渋谷区立松濤美術館、一九九三年)

(図10) 拙著『ユルかわ日本美術史』(祥伝社新書、二〇一八年)

(図11、12、16、17) 『錦絵に見る病と祈り 疱瘡・麻疹・虎列刺』(町田市立博
 物館、一九九六年)

(図13) 『浮世絵師たちの神仏』(渋谷区立松濤美術館、一九九九年)

(図14) 『国華』二四〇号、明治四十三年

(図15、18、19、20) 『くすり博物館収蔵資料集④はやり病の錦絵』(内藤記念く
 すり博物館、二〇〇〇年)